



練供養

平成11年3月  
第30号

発集発行

中町2丁目2-8-4  
中府郡芸安島  
正観寺  
真言宗  
小出真行

散華

自分のものでありながら、  
その実体を知りたいのは、  
我が心である

「十住心論より」

散華とは文字通り花を散らすこと、花を投げることをいいます。では、どの様な時に行うのかと申しますと、普通、道場内を僧が行道(供養しながら歩くこと)したり、僧が稚児と歩いて行くとき(練供養などに、(仏を讃える)華を投じながら厳かに進みます。



密教の散華として特別なものに(散華得仏)といわれるものがありますが、これは、ひろげられた曼荼羅に向かって、目をつぶった(あるいはかくした)信者が華を投げ、その落ちたところの仏を自分の念持仏とする儀式ですが、曼荼羅の上に描かれているすべての仏は、その位置がどこであろうとも、すべて大日

如来の化現(あらわれ)であり、大日如来と同じ位置(同

一法然位)に立ったと考えられていますので、多数の方が入壇されます血縁灌頂でも、最終的には「大日如来」と縁を結ばせていただくのです。



## 御七日御修法とは

「御七日御修法」が、一月十二日に当山の本堂で密教青年会主催のもとに厳修されました。この「御七日御修法」の御七日とは、正月の八日から十四日までの七日間のことで、元旦から七日までを「前節」というのに対して使うことばなのです。

民間でいう「松の内」が終わったあと、宮中の真言院で行う真言宗最大の秘法とされています。この七日を通じて行われる大法会の目的は、すべて皇室と国家の平安を祈るもので「玉体安隠・皇の無窮・鎮護国家・五穀豊穰」と祈願するのです。

この法要の始まりは、弘法大師晩年の承和元年(八三四年)のことで、勅令を奉じて中務省で行われたときにさかのぼります。「性霊集」にはその由来が記され、以後長く恒例となり、これにより皇室と真言宗の結び付きは他宗の及びもつかないものとなったのです。この法要の導師となりますのが代々東寺(教王護国寺)の長者でこの秘法は、別名(真言院御修伝)といわれるように、宮中の真言院で行われていましたが、この真言院が大破、破損等中絶、復活を繰り返して明治十六年に東寺の灌頂院で御衣加持を主と

して再興され、今日でも奉持して加持し、加持し終わって奉還するという形で盛大に行われているのです。



## 子育て

生まれて間もない赤ん坊は一日の大半を寝て過ごします。しかし月を増すごとに徐々に眠る時間が短くなり、やがて寝返りをうち、這い回り、伝い歩きをするようになりますと、親としての心中は穏やかならざるものがあります。

子どもの成長を見るのを厭う親があるはずがありませんが、今まで静かで平和だった家庭の中にいろいろな事件が起こるもので、母親はノイローゼ気味になってしまいます。「ちょっと目を離れたスキに食べてはいけないものを食べてしまった」とか「大事な物を壊してしまった」

とか…。こんなことは日常茶飯事になってまいります。

大人の目からすれば「なぜこんなことをするの?これは大事なものなんですよ。本当におまへは悪い子ね」ということになりましたが当の赤ん坊にしてみれば、叱られて泣くだけ。なぜ叱られているかその理由はいくもわかっていないのです。ですから叱られたあと、すぐ同じことを繰り返してまた叱られる。そんなことはよくあるものです。

それが三才位になりますと、少しずつ(やつてよいこと悪いこと)がわかってくるのでしょうか?いや「これをしたら怖い顔をして叱られる。だからよそうか」とか、「こうすれば親に気に入られ、ほめられる」とかいうのでしょう。思うに、好かれること、嫌われることの経験を積み重ねながら、自分なりに物事の善悪の基準として身につけていくのでしょう。

幼児は悪を悪と意識せず、無心に行動の末の結果が大人の基準からすれば悪というだけで決して当人は自分の心をいつわっていないがために叱られても一時的に泣きますが、すぐまた何事もなかったように遊び始めます。

要するにいかに寛容な気持ちで見守ることができるかにかかっているのでしょうか。

## 悔いのない人生とは？

人間誰しも老いていく限られた人生ならば、日々悔いのない生活を重ね、その生活の末に、やがて訪れるであろう死を静かに迎えたいものです。この思いが生に対する無常の生き方なのです。人それぞれ姿・形が異なっている様に、悔いのない生活のとらえ方にもおのずから相違があるでしょう。

でも、人間の欲望は無限に広がりゆく可能性があり、本能と感情によって自分の思うこと、欲すること、したいことを行動することが、悔いのない人生だと思ふことには危険性をはらんでいるような気がします。

親と子や、職場の上司や部下の間で見られる考えの違いを世代の断絶といっていますが、世代の考えの違いは、今日の時代だけでなく、いつの時代にもある現象で、世代の考えの違いは社会を経験してきた者と、未経験者との違いに加えて、変化していく社会のとらえ方による見方の違いです。

人生は生活の場であって、生活には喜びや悲しみ、また苦勞の連続であり、さらに不幸や失敗、悲痛なできごとを繰返しています。年輩者はこのような多くの喜怒哀楽の生活を体験して

きた人であり、人生経験をあまり知らない若い人とは、考え方が違うのが、むしろ当然なことなのです。

人間という者は、天地の自然を離れて、一日瞬時たりとも生きることができないと考える時、真の悔いのない人生は現在の自分にとつて、何が一番正しいか、いかなる行動がよいか、確かであるかを探求して、自分でその道を定め、ありがたい『この世』の生を完うすべきである様に思えます。

人間の煩惱から生じるところの傲慢、怠惰無思慮を謙虚に反省し、自己の迷い、瞋り、嫉、おろかさを知つて、少しでも煩惱を消除することにあらねばなりません。

年輩者は社会の経験者として、深く人生の道を求めて歩み続けることが、真の悔いのない人生ではないでしょうか。



## 墓地有

一㎡ 八十万円より

※他宗派の方も可

## お逮夜

よく耳にする「お逮夜」と申しますのは、亡くなられた日から数えて七日目に行われます法要のことで、夜に逮ぶ、と書きますので、忌日の前夜、六日目の宵、ということになります。かつて一日は夜―朝―日中と推移してしました。(修業中は初夜、後夜、日中)その当時の暦のなごりであり、逮夜とは一日の始まり。といった意味でしょう。

初七日法要は、十三仏曼荼羅図中の不動明王をご本尊とし、そのご縁にあずかったものです。臨終からその間まで、不動様の三昧に入り、守護されています。いわば不動明王的な生活がされているのです。

では、この不動さまはどんな仏さまなのかと申しますと、太陽から歩いてやってこられ、火災を背負っていますのは、大日如来の使命をおび、そのテーマを代行され、燃えさかる炎は人間の煩惱をエネルギーの薪にし、火の浄化力を表しています。また、忿怒の形相は、この世の不条理に耐え、力感みなぎる腕は恐れるべきものは何もないように思えます。

さて、お釈迦さま以来仏教は人が亡くなれば、火葬、荼毘に付します。本位的には遺体の保存

### 坂東観音霊場巡拝

日時 平成11年5月10日  
 ~5月15日(5泊6日)  
 会費 122,000円  
 定員 15名

ではなく宇宙の構成要素、つまり五大に帰るわけ、大地、水、火、風、空気のいずれにも還元されます。  
 しかし、真言宗では、ご遺体を火葬場で焼くと考えerのではなく、お葬式の引導作法の中でお導師、亡者ともども不動明王の大世界に入り、その加持力で荼毘に付されると考えます。土葬であつても荼毘であることに変わりありません。かんじんなのは、お不動さまの焼える熱い心をいただき、熱い涙を胸のうちに流しつつ、故人にま向うことでしょう。大切な命の火を消さないで継承するために。



### 小豆島八十八ヶ所巡拝

日時 平成十一年四月一日~四月三日  
 (二泊三日)  
 会費 三五、〇〇〇円  
 定員 十五~十八名  
 バス つばめ交通

### 年中行事

- 1 / 1 (金) ~ 1 / 3 (日) 諸祈願
- 1 / 12 (火) 御七日御修法遥拝法要(密青会)
- 2 / 3 (水) 星祭り
- 3 / 14 (日) 観音大祭
- 3 / 21 (日) 彼岸中日
- 4 / 1 (木) ~ 4 / 3 (土) 小豆島巡拝
- 5 / 10 (月) ~ 5 / 15 (土) 坂東観音霊場巡拝予定
- 7 / 2 (金) ~ 7 / 3 (土) 石鎚山参拝
- 8 / 22 (日) 地藏祭
- 9 / 23 (木) 彼岸中日
- 12 / 31 (金) 年越祭